創価大学　看護学部
紀要第６巻
（2021年７月31日発行）

〈資料〉

国際看護研修（フィリピン大学）で地域看護学実習に参加した学生の学びと成長
－都市と地方でフィールドワークを実践して－

田中博子[1)]　秋元とし子[2)]

Learning and Growth of Students Participated in Community Health Nursing Practicum of University of the Philippines at Global Nursing Training Program
— Conducting Fieldwork in City and Rural Area —

Hiroko TANAKA[1)] Toshiko AKIMOTO[2)]

目的：フィリピン大学看護学部の都市と地方での地域看護学実習に参加し、フィールドワークを行った学生の学びと成長を明らかにする。

方法：研修参加者３名にグループインタビューを実施した。逐語録を作成し、文脈の意味まとまり毎に要約しカテゴリー化した。

結果：29 コード、12 サブカテゴリー、５カテゴリーを抽出した。【看護観の広がり】、【フィリピンの健康問題と保健医療サービスの特徴の理解】、【異文化の理解】の３カテゴリーと、特徴的な【人としての生き方の学び】、【将来へのきっかけと今後の決意】の２カテゴリーから構成されていた。

考察：自己が主体的に関与するフィールドワークによる様々な経験から【人としての生き方の学び】、【将来へのきっかけと今後の決意】という人としての内面的成長の成果が認められた研修であった。本研修での学びが今後の様々な学習場面で関連づけられ、日本とフィリピンの文化の理解を更に促すと考える。

key words：国際看護研修、フィールドワーク、学びと成長、地域看護学実習、フィリピン
global nursing training program, fieldwork, learnings and growth, community health nursing practicum, Philippines

1) 創価大学看護学部　2) 前創価大学看護学部
1) Soka University, Faculty of Nursing 2) Former Soka University, Faculty of Nursing

Ⅰ．はじめに

世界のグローバル化に伴い、日本における在留外国人数は2012年より過去最高を更新し続けている（政府統計の総合窓口 , 2020）。異文化を有する人々へ看護を実践する機会は今後益々増えるものと予測される。このような社会情勢の中、看護系大学においてもグローバル人材の育成という観点から、異文化を体験する多様な教育機会の提供、言語教育、授業方法、形態の工夫等グローバル化に対応する教育が進んでいる。

創価大学では2014年度より文部科学省の「スーパーグローバル創成支援」の採択を受け、目標達成に向け全学的な取り組みを行っている。

看護学部でも海外研修経験のある看護師の輩出を目的に、独自の海外研修プログラムを構築し、年間５つの研修を展開している（2019年度）。そのプログラムの１つに2017年度から実施している３年生以上を対象としたフィリピン大学研修がある。

フィリピン大学研修の特徴は、フィリピン大学看護学部（University of Philippines, College of Nursing、 以下UPCNとする）教員の協力を得て、人々の生活の実態に触れる機会を多く組み入れていることである。具体的には、フィリピン大学（以下、UPとする）の地域看護学実習に同行し、住民の生活環境と暮らしの実際を知るという形態をとる。コミュニティーや一次保健医療施設（以下、ヘルスセンターとする）で出会う住民、医療者、ヘルスボランティア（無償の非医療職者）等にフィールドワークテーマに沿ってインタビューをする。

フィールドワークのねらいは、本学の学生（以下、学生とする）が現地の人々の生活と健康の実態を“実感”をもって捉える機会とすることである。看護にはその人らしい生活を支援する役割があることから、生活を知ることは看護の基盤である。フィリピンの都市と地方では生活環境、保健医療へのアクセシビリティの違いがあり、都市だけでなく地方も知ることがよりフィリピンの看護や保健医療の特徴の理解につながると考える。学生は、そのほかにも現場でしか得られないさまざまな経験や学びを得るものと思われる。

看護系大学でも海外研修は多くの大学で実施されており、研修成果に関する文献も数多い。加藤（2020）は、看護系大学の海外研修に関する文献の特徴として、研修報告と自記式質問紙による調査報告が多いこと、研修目的の傾向として①語学・異文化体験、②専門的交流（保健医療福祉）の２つの混合が多いことを挙げている。研修内容では見学・視察中心型（花井ら , 2014; Janjua, 2019; 田代ら , 2016; 東田ら , 2015; 吉田ら , 2017）が多く、海外研修にフィールドワークを取り入れた看護学生の学びや成長を明らかにした報告は少ない。

そこで、本研究はUPCNの都市と地方での地域看護学実習に参加しフィールドワークを行うことを通し、学生がどのような学びや成長を実感したかをインタビュー調査により明らかにする。これにより研修目標達成の評価ならびによりよい研修への示唆が得られるものと考える。

Ⅱ．研究方法

１．研究デザイン

質的記述的研究

２．対象者

2018年度の国際看護研修（フィリピン大学）に参加した学生５名のうち、参加当時３年生で調査

時に在学していた３名。うち２名は今回が初めての国際看護研修であり、１名は国際看護研修（アメリカ）の経験者である。本学は４年次春学期に「母性看護学実習」と「地域・在宅看護学実習」が配置されているため、対象者は研修時点ではこれら２実習は経験していない。

３．データ収集方法

1) グループインタビュー

2019 年４月に対象者３名にグループインタビューを行った。インタビュー法を採用した理由は、本研修の学びや成長をナラティブな情報を用いて明らかにするためである。

グループインタビューは、グループダイナミクスによりメンバーの発言に反応するという利点があり、メンバーが似た背景を共有している場合は自分の意見を気楽に表明できる（ポーリット＆ベック，2010）ことから採用した。

時間は約 90 分で、静寂性とプライバシーが保てるセミナー室で行い対象者の同意を得てインタビュー内容を IC レコーダーに録音した。「国際看護学」の科目を担当する研究者２名がファシリテートし、印象に残る具体的体験を自発的に語ってもらうことから始めた。ファシリテーターは、対象者が話しやすい雰囲気づくりをし、一通り具体的な話が出た後、インタビューガイドを参考に語りを引き出す質問をし、自由に語ってもらった。

インタビューガイドに準備した主な質問は以下の４項目であった。

1. この研修で得た学びは何か。またそれらはどのようにして得られたか。
2. この研修で成長した点は何か。
3. 現地でのフィールドワークを通して、自分の研修テーマの探求はどのように深まったか。
4. 本研修はどのような意味のある研修だったか。

４．分析方法

録音したデータから逐語録を作成した。逐語録を精読し、研修での学びや成長を表現している箇所を文脈に留意しながら１つの意味まとまり毎に区切った。意味まとまりを要約し、内容を表すコード名を付けた。コード名は学生の語りが活かされるよう留意して付けた。次に、内容の類似性に沿って、コードからサブカテゴリー、カテゴリーへとカテゴリー化を行い抽象度を上げた。カテゴリー化にあたっては信頼性を確保するために研究者間で吟味・合意を重ねながら進めた。

５．倫理的配慮

研究対象者には、研究目的、意義、方法、協力の自由意志・拒否権、利益・リスク、個人情報保護・成績には無関係であること、利益相反がないこと、研究成果の公表を記載した「研究参加に関する説明書」を用いて説明し、同意書に署名を得た。逐語録作成時には、個人を特定しうる情報は削除もしくは匿名化した。

本研究は研究者の所属大学の人を対象とする研究倫理委員会の承認を受け実施した（承認番号：30081）。

Ⅲ．2018 年度国際看護研修（フィリピン大学）の概要

１．研修目的・目標

本研修は、都市と地方のヘルスセンターを拠点に展開されている UPCN 学生の地域看護学実習に参加し、人々の生活環境と暮らしの実際に触れることを通し、さまざまな健康レベルの対象に対するフィリピンの文化・社会・生活を反映した多様な看護のあり方を学ぶことを目的とした。研修目標は表１に示す。

２．研修期間と研修先

期間：2019 年２月 25 日(月)～３月９日(土)
13 日間

研修先：フィリピン大学看護学部

３．日程と参加者

研修日程を表２に示す。２週間のうち、主に１週目は都市マニラで、２週目は地方の Cavite 州 Alfonso 市で行った。参加者は、３年生３名、４年生２名、引率教員１名であった。

表１．本研修の目標

1. 健康問題とその背景について、その国の風土、文化、伝統、宗教等をもとに多面的に理解できる。
2. 対象国の人々の生活・文化と医療、保健、看護の現状と課題について、医療システム・社会・生活状況をふまえ理解できる。
3. 英語によるコミュニケーション能力を高め、積極的にコミュニケーションをとることができる。
4. 対象国の文化・社会の現状の理解を通し、自己への気づきを深めることができる。
5. 異文化をもつ人々を尊重する態度を身につける。

表２．2018年度　国際看護研修（フィリピン大学)日程

日数	日にち	曜日		滞在
1	02月25日	月	羽田発 → マニラ着	マニラ
2	02月26日	火	関係部門へ表敬挨拶。フィリピン総合病院見学 UPCN教員によるフィリピン大学看護学部の講義、１年生の授業に参加・交流	マニラ
3	02月27日	水	社会福祉施設ホスピシオの見学	マニラ
4	02月28日	木	UPCN２年生の地域実習に同行（マニラ市内ヘルスセンター）、家庭訪問 １年生の授業に参加・交流	マニラ
5	03月01日	金	代替療法に関するセミナーへ参加 UPCN教員によるフィリピンのヘルスケアシステムの講義	マニラ
6	03月02日	土	市内視察	マニラ
7	03月03日	日	市内視察	マニラ
8	03月04日	月	予防接種に関するセミナーへ参加、１年生の授業に参加・交流	マニラ
9	03月05日	火	UPCN４年生と共に地域看護実習のためにカビーテ州へ出発 ヘルスセンターへ到着後、UPCN４年生と家庭訪問	カビーテ州
10	03月06日	水	カビーテ州にてUPCN４年生と家庭訪問	カビーテ州
11	03月07日	木	カビーテ州にてUPCN４年生と家庭訪問	カビーテ州
12	03月08日	金	最終プレゼンテーション 研修終了式、交流会	マニラ
13	03月09日	土	マニラ発 → 羽田着	マニラ

４．事前学習

研修参加者が決定した2018年10月以降、学生は各自のフィールドワークテーマの検討を進めると同時に事前学習会に参加した（表3）。フィールドワークテーマを表4に示す。

５．主な研修内容

研修行程のすべてにUPCN卒業生のティーチング・アシスタント（以下TAとする）１名が同行し、施設関係者との連絡調整、学生の英語力に応じた学習支援、滞在期間中の安全面への配慮など、学生が研修目標を達成できるよう様々な支援を行った。

1) UPCN教員によるフィリピンの保健医療に関する講義

UPCNの概要、実習カリキュラムや、フィリピンの保健医療事情に関する講義を受けた。学生は活発に質問をしていた。

2) フィリピン総合病院と福祉施設の見学

フィリピン唯一の国立病院であるフィリピン総合病院と、乳児から高齢者まで身寄りのない人々が暮らす福祉施設を見学した。学生は高齢の入居者と交流を行った。

3) UPCNの授業・演習への参加

主に１年生の授業と技術演習に参加した。グループワークに学生も加わり、意見交換をした。

4) UPCN ２年生の地域看護学実習（マニラ）へ参加・フィールドワーク

この実習（Community Health Nursing：２年次後期）は、マニラ市内の貧困地区をフィールドとし、受け持ち世帯の看護過程を展開する２週間の実習である。UPCN学生自ら聞き込みを行い、慢性疾患を有する受持ち世帯を探す。学生はUPCN２年生とペアを組み、１－２件家庭訪問をした。学生はUPCN学生の情報収集と健康指導を見学した後、住民にインタビューを行った。UPCN学生

表３．事前学習内容

回数	事前学習内容
1	各自のフィールドワークテーマの発表・討論 フィリピン共和国の概要
2	フィリピン共和国の保健医療制度と保健事情
3	フィリピン共和国の歴史・文化・社会 Community Health Nursing (1) ・バランガイ*の機能と役割
4	フィリピン大学の歴史、フィリピン大学と創価大学創立者 Community Health Nursing (2) ・WHO-PENとPhil-PEN
5	Community Health Nursing (3) ・コミュニティー・アズ・パートナーモデル
6	タガログ語学習会

＊バランガイとは、フィリピンにおける最小行政単位のことである。

表４．学生のフィールドワークテーマ

学生	テーマ
A	Reproductive health activities in the Philippines
B	Key focus of health education for family members with diabetes mellitus in the Philippines
C	Unique community health activities to the people living in poverty in the Philippines

は、タガログ語から英語への通訳をした。

5) UPCN ４年生の地域看護学実習（Cavite 州）へ参加・フィールドワーク

マニラから車で２時間程に位置する Cavite 州 Alfonso 市をフィールドとする４年生の実習（Intensive Community Nursing Experience: ４年次後期）に参加した。本実習は、これまでに学習した理論や概念・技術を応用し、地域看護専門職としての初歩的能力（beginning competencies）を身につけることを目的としている（University of Philippines College of Nursing Faculty , 2006）。UPCN 学生は、８週間の実習期間中、平日は住民宅（ホストファミリー）に２－３名１組で宿泊し、週末はマニラに戻る。

Cavite 州は 2015 年時点で人口約 368 万人（Philippines Statistics Authority, 2018）で、自然豊かな農村地帯であり貧困世帯も多い。学生は、UPCN 学生の住民健康診査および Phil-PEN １スクリーニングデータ収集のための家庭訪問に同行した。途中までは２輪バイクにサイドカーがついた乗物に乗り、以降は森の中の道を徒歩で向かった。学生は UPCN 学生の実践を見学するとともに、住民へのインタビューと Phil-PEN スクリーニング項目のバイタルサイン測定や身体計測などを実施した。

6) 最終プレゼンテーション

研修 12 日目に各自のフィールドワークの実践について①テーマ設定の背景　②目的　③方法　④結果　⑤考察の構成でスライドを作成し英語で発表した。UPCN 教員・学生が出席した。各発表後にはフィリピンと日本の医療・看護に関する活発な質疑応答が行われた。

Ⅳ．結果

学生３名が語った内容から、研修での学びと成長に関する語りを抽出しコード化した。その結果、29 コード、12 サブカテゴリー、５カテゴリーを抽出した。

以下、カテゴリーを【　】、サブカテゴリーを［　］、コードを〈　〉で示す（表 5）。

１．【看護観の広がり】

学生は、〈フィリピンでは患者と家族を一つとしてみていることを知った〉ことなどから［家族看護のとらえ方の変化］を認識していた。また、〈看護師は、貧しい人でも利用できる植物やマッサージを用いていた〉などの［科学的エビデンスだけが最優先ではないという考え方への気づき］や、〈日本の看護との違いを知ったが、ニーズや背景、考え方が異なるため良いところをそのまま日本に導入はできない〉という［日本の看護との違いの気づき］から、【看護観の広がり】を得ていた。

２．【フィリピンの健康問題と保健医療サービスの特徴の理解】

学生は、地方での〈ヘルスボランティアがすべての世帯の家庭訪問をし、ヘルスセンターへアクセスできない人々の健康観察と健康教育を行っていた〉場面を通し、［医療アクセスが困難な人々へのアプローチの理解］をしていた。また、〈多産による人口増加と貧困が問題となっていた〉ことなどの［リプロダクティブヘルスの問題背景の相違点の気づき］を得ていた。これらが、【フィリピンの健康問題と保健医療サービスの特徴の理解】となっていた。

表５．国際看護研修（フィリピン大学研修）に参加した３名の学生の学びの内容

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
看護観の広がり	家族看護のとらえ方の変化	研修前後では家族看護に対する考えが全く変わった
		フィリピンでは患者と家族を一つとしてみていることを知った
	科学的エビデンスだけが最優先ではないという考え方への気づき	人々が良いと信じている伝統的ヒーラーによる代替療法を、患者に害がない限り医療者は尊重していた
		看護師は、貧しい人でも利用できる植物やマッサージを用いていた
		ヘルスボランティアは、家族計画の方法について個別的・伝統的対応法も選択肢に入れ、貧しい人でも選択出来るような多様なアプローチをしていた
	日本の看護との違いの気づき	日本の看護との違いを知ったが、ニーズや背景、考え方が異なるため良いところをそのまま日本に導入はできない
フィリピンの健康問題と保健医療サービスの特徴の理解	医療アクセスが困難な人々へのアプローチの理解	ヘルスボランティアがすべての世帯の家庭訪問をし、ヘルスセンターへアクセスできない人々の健康観察と健康教育を行っていた
	リプロダクティブヘルスの問題背景の相違点の気づき	多産による人口増加と貧困が問題となっていた
		日本は性に関する話題を避ける傾向にあるが、フィリピンではヘルスワーカーが個別的な家族計画指導をしていた
異文化の理解	文化の違いの気づきと寛容性への意識	生活習慣や文化の違いが大きく、フィリピンの人々の行動の意味を知るのは興味深かった
		文化の違いの大きさを知ったことで、在日外国人に対していかに相手の文化を考えて看護を実践するかが大事だと思った
		異文化に対する理解が劇的に変わった
		どうしたら異文化の人に寛容性を持てるかを考えた
		文化が異なる人への寛容性のスタートは、理解しようとする心だと思う
	コミュニケーションの取り方の気づき	語学力だけではなく、意識的に相手に伝わるように言葉・表現を考えることが大事ということに気づいた
人としての生き方の学び	人間の幸せについての思索	人々の貧しくても輝く笑顔から、幸せとは何かをすごく考えた
		人間の使命は、どんな状況でも幸せに生きることなのではないかと考えた
	病気・治療に対するしなやかなとらえ方への気づき	慢性疾患があっても人生を前向きに受けとめていることはすごいと感じた
		病気イコール不幸なのではない。本当の不幸とは病気に負けることであり、健常者として病気の人を見下していた自分に気づいた
		患者を病気から見るのではなく、“その人”を見るという意味がわかった
	人として生きることの普遍性への気づき	国は違っても私たちと同じように普通に生活をし、平和な生活を望み、看護学生も必死に勉強していることを肌で感じた
将来へのきっかけと今後の決意	将来の方向性を考えるきっかけ	卒業研究や自分の進路を考えるきっかけになった
		将来、やりたいことが見つかった
	自己の課題と感謝への行動の決意	最終プレゼンで成果を十分に発揮できなかった悔しさが契機となり、学業への取り組み姿勢が変わった
		海外研修は、学生に生き方を変えるほどのきっかけを与える
		今後、いろいろなことに挑戦しフィリピンの方々に報告できる実績を残し、恩返しがしたい
		フィリピンの方々のサポートへの感謝は、自分の行動で示したい
		研修は終わったが、これからの行動が自分にとって一番大事で、それが私たちの成果になり続ける
		感謝は行動でしか返せないと現地で気づいた。この気づきは、一生の糧だ

３．【異文化の理解】

学生は異文化に触れる経験のなかで、〈異文化に対する理解が劇的に変わった〉ことや〈文化が異なる人への寛容性のスタートは、理解しようとする心だと思う〉などから［文化の違いの気づきと寛容性への意識］が生じていた。毎日英語で会話するなかで、〈語学力だけではなく、意識的に相手に伝わるように言葉・表現を考えることが大事ということに気づいた〉という［コミュニケーションの取り方の気づき］を得ていた。このような経験が【異文化の理解】に繋がっていた。

４．【人としての生き方の学び】

学生は、都市と地方で貧困世帯が多いコミュニティーで家庭訪問をする経験を通し、〈人々の貧しくても輝く笑顔から、幸せとは何かをすごく考えた〉こと、〈人間の使命は、どんな状況でも幸せに生きることなのではないかと考えた〉ことから［人間の幸せについての思索］をしていた。また、〈慢性疾患があっても人生を前向きに受けとめていることはすごいと感じた〉ことなどから［病気・治療に対するしなやかなとらえ方への気づき］を得ていた。また〈国は違っても私たちと同じように普通に生活をし、平和な生活を望み、看護学生も必死に勉強していることを肌で感じた〉ことが［人として生きることの普遍性への気づき］に繋がり【人としての生き方の学び】となっていた。

５．【将来へのきっかけと今後の決意】

学生は、〈卒業研究や自分の進路を考えるきっかけになった〉などと語り、研修は［将来の方向性を考えるきっかけ］となっていた。また、住民をはじめ多くの人々の支援を受けたことから〈今後、いろいろなことに挑戦しフィリピンの方々に報告できる実績を残し、恩返しがしたい〉、〈最終プレゼンで成果を十分に発揮できなかった悔しさが契機となり、学業への取り組み姿勢が変わった〉などの［自己の課題と感謝への行動の決意］をしていた。研修はこのような【将来へのきっかけと今後の決意】に繋がっていた。

Ⅴ．考察

１．学生の本研修での学び・成長とその特徴

本研修ではUPCNの都市と地方の地域看護学実習のコミュニティーでフィールドワークを実施した。フィールドワークは、現地調査と訳され文化人類学分野での主要な研究手法である（波平，2016）。本研修では、フィールドワークを広い意味で用い、実際にコミュニティーに身を置き、目で見て、耳で聞き、人々にインタビューを行いテーマに関する情報を収集する過程とした。

この方法を取り入れた学生の学びは、５つのカテゴリーにまとめられた。そのうち【看護観の広がり】、【フィリピンの健康問題と保健医療サービスの特徴の理解】、【異文化の理解】は、対象国の健康問題と保健医療システムおよび看護の現状に関するものであり、研修目標に掲げていた内容である。看護系大学の海外研修に関する文献を検討した加藤（2020）や他の報告（麻原ら，2018；花井ら，2014）によると、海外研修の効果として国際的視野の広がり、異文化理解、語学学習の動機付け、看護観の深化等が多く挙げられており、本研修でも他大学の研修と同様の学びが得られていた。

一方、特徴的なのは、【人としての生き方の学び】と【将来へのきっかけと今後の決意】である。海外研修での学生の学びを報告した文献の多くは質問紙調査が用いられている（加藤，2020）

なかで、本研究はインタビュー法によるナラティブな情報からこれらの学びを明らかにすることができた。学生は直接住民とコミュニケーションをとり、慢性疾患があっても人生を前向きに受け止めている姿や、経済的には貧しくても輝く笑顔の人々と関わり、貧困にある人々の生活の実際を知る経験をしている。広石（2003）は、学びはまず経験がありそれを基盤として生起すること、学びの真価とは経験自体にあり、経験が情報を知識として意味づけし学びとなると述べている。また佐藤（2003）は、経験が教育的であるためには教育者が、学生の現状の興味や能力で可能な範囲を勘案しつつ、その限界を超えて「新しい領域へと向かう」ことができる臨界点を設定することと述べ、主体性を発揮して自我が最大限関与する経験ほど、経験の質が高められるという。本研修で学生は、糖尿病、家族看護、リプロダクティブヘルスという既習内容をテーマとしており、TA や UPCN 教員のサポートを受けたフィールドワークは、学生の現状の可能範囲を考慮した対応だったものと思われる。また、異文化の地で主体的に英語での情報収集を行うという“臨界点”に挑戦したと言え、自己が主体的に関与するフィールドワークであったと考える。【人としての生き方の学び】は、主体的に直接住民や保健医療関係者と関わるという経験から得られた、人としての成長に関する学びであったものと思われる。

半面、学生は最終プレゼンで成果を発揮できなかった悔しさも経験している。英語で思うように意思疎通ができなかった場面も数多くあったことも推測される。【将来へのきっかけと今後の決意】は、学生は悔しさの経験を行動変容につなげ、フィリピンの人々への感謝の思いを自分の行動で示すという決意に転換させていた。広石（2003）は、経験がもたらす成熟性として、挫折や失敗こそがより豊かな経験へと開かれる契機と述べている。フィールドワークの実施は、学生に悔しさや感謝などのさまざまな感情を生起させるが、その感情を含めた経験が【将来へのきっかけと今後の決意】へと達したのではないかと考える。生き方の学びや今後の決意という内面的な成長は、看護職としての人間性、異文化に対する感受性の土台となるものと考える。本研修の学生の学びと成長の内容（コード）は５つの研修目標すべてに該当していたが、内面的成長という成果が認められた研修であったと考える。

２．今後の課題

フィールドワークにおいては言語の壁が大きいことや、暑さの中での活動という面から体力を消耗しやすいことを十分に考慮する必要がある。そのため、学生の語学力や体調面を把握し、負担が大きくなりすぎないよう留意する必要がある。

本研修は３、４年生を対象としているが、３年生は日本での地域看護学実習が未経験である。本学３年生の既習事項を UP 側へ伝えた上で研修内容やサポートの調整を行っているが、UPCN の地域看護学実習に参加するには学習面のレディネスが不足していることは否めない。しかし、中長期的な視点でみれば、フィリピンの看護実践を知ったことが日本での地域看護学実習の学習意欲を高める可能性もある。本研修での学びが今後の様々な学習場面で関連づけられ、日本とフィリピンの看護の違いや共通点の発見、文化の理解を促すものになると考える。

今後も、フィリピン大学側と連携・調整を行いながら学習支援体制を整え、本研修の一層の充実を図りたい。

Ⅵ．研究の限界と課題

本研究の対象者は３名であり、研修参加者全員を対象とすることができなかった。そのため、当該年度の本研修の学生の学びと成長の全体を明らかにしたとはいえない。また、今回は研究への活用を意図した参加観察記録は残していなかったが、研修時から学生の観察記録を作成することで学び・成長を豊かに記述できると思われる。今後も学生の学びと成長を支援するための工夫を重ね努力していきたい。

謝辞

2015 年の本研修の企画段階からご支援をくださいました元フィリピン大学看護学部長 Dr. Josefina A. Tuazon 先生に厚く感謝申し上げます。そして、2018 年度の研修実施にあたりご尽力くださった UPCN の先生方、住民の皆様ならびに保健医療関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

本研究において利益相反はない。

文献

麻原きよみ , ハフマン・ジェフリー , 井上麻未 , 他 (2018). 聖路加看護大学海外留学プログラムの特徴と成果 ―学生の学びと成長に焦点をあてて―. 聖路加国際大学紀要 , 4, pp.18-23.

花井節子 , 山下美穂 , 福岡真理 (2014). 看護学科学生の海外研修の意義と課題 ― 2012 年度海外研修参加学生の学びから―. 鹿児島純心女子大学看護栄養学部紀要 , 18, pp.86-96.

広石英記 (2003). 市民教育としての協働経験の可能性―新しい学びのモードの模索―. 経験の意味世界をひらく ―教育にとって経験とは何か― (pp.55-77). 東京 : 東信堂.

Janjua, Najma(2019). Global learning experiences of Japanese nursing students through international exchange. *Journal of Medical English Education*, 18(3), pp.65-71.

加藤穣 (2020). 看護系大学における短期海外研修の現状と課題 . 石川看護雑誌 , 17, pp.1-10.

波平恵美子 (2016). 質的研究 Step by Step. 第２版 . 東京 : 医学書院.

Philippines Statistics Authority (2018). Cavite QuickStat-June 2018. https://psa.gov.ph/content/cavite-quickstat-june-2018　2021 年２月 25 日閲覧

ポーリット , D. F. & ベック , C. T., 近藤潤子監訳 (2010). 第 15 章 自己報告データの収集 . 看護研究　原理と方法　第２版 (pp. 353-355). 東京 : 医学書院 .

佐藤隆之 (2003). プロジェクト教育論における経験の解釈 ―キルパトリックとボーダの比較検討―. 市村尚久ほか編 , 経験の意味世界をひらく ―教育にとって経験とは何か― (pp.193-212). 東京 : 東信堂.

政府統計の総合窓口 (e-Stat), 在留外国人統計 . https://www.e-stat.go.jp/stat-search/database?page=1&toukei=00250012&tstat=000001018034　2020 年 12 月５日閲覧

田代麻里江 , 巽彩香 , 藤田栞 , 他 (2016). 2015 年度国際看護学演習　米国カリフォルニア州における海外看護研修報告 . 梅花女子大学看護保健学部紀要 , 6. pp.33-44.

東田吉子 , 中田覚子 , 竹尾惠子 (2015). タイ国、ブラパ大学における国際看護論の実施と学習の成果 . 佐久大学看護研究雑誌 , 7(1), pp.65-74.

University of Philippines College of Nursing Faculty (2006). Competency-Based BSN Curriculum. Revised edition. Manila: University of Philippines.

吉田美穂 , 丸山純子 (2017). 国際交流活動から得た学生の学び ― 2016 年カンボジア・スタディツアー報告 ―. 新見公立大学紀要 , 38, pp.173-177.